吉岡進の釣りを楽しく感じるままに

E2F

Enjoy Every Fishing no.08

相模湾のタチウオ

文◉高橋 剛／撮影◉本誌編集部

深いから電動リールってわけじゃないんだよ

★手巻きリールにこだわるか、それとも快適ラクチンな電動リールか――。釣り人を悩ませる永遠のテーマだが、ヨッシーは「釣れるほうでいいんじゃない？」とアッサリ。初挑戦となる相模湾のタチウオ、大きなポテンシャルを感じながら、こだわらないことの強さを見せつけた。

「水深は100メートルです。反応は80～90メートルあたりに出てますよ」

相模湾平塚港・庄治郎丸の大堀耕史船長のアナウンスが飛ぶ。

船が港を離れてから、わずか10分足らず。陸地が間近に見えるのに、急に深くなるのが相模湾の特徴だ。

「ひゃ、ひゃく！」

E2F取材班が悲鳴を上げる。イチロウこと鹿島一郎さん、トモキこと板倉友基さん、そしてライターのタカハシゴーは、手巻きリールを使っているのだ。

150グラム前後のジグを、落とすのはいい。やることと言えば、親指で両軸リールのスプールを軽く押さえてサミングするぐらいだ。

あとはボーッとしていても、ジグが勝手に海底目がけてまっしぐらに突き進んでくれる。

指示ダナをジグが通過するあたりでは、緊張感が増す。タチウオはフォールするジグにアタックしてくるから気を抜けない。

シャクったりフォールさせたりという誘いも苦にはならない。

「タチウオこい！」「食え！」という期待感いっぱいだから、多少の重みなど何も問題ない。

だが、回収はツラい。

「はい、上げてくだ～い」という大堀船長のアナウンスに応じ、文字どおりに回収するだけだ。リールを巻く、巻く、巻く。それしかない。

ごくまれに回収中に青物がヒットすることもあるが、そうそう起こらない。ただジグを手元に引き寄せるだけ。リールを巻くだけだ。

タカハシゴーが使用していたリールは、シマノ・オシアカルカッタ300HG。最大巻き上げ長は81センチである。

100メートルのPEラインを巻き取るためには、約120回もクルクルクルしなければならないのである。

いや、リールを巻く行為だって楽しい。釣り人ならだれだって家でなんの気なしにリールをクルクルすることがあるだろう。

だが、10月30日の庄治郎丸・6号船の船上において、回収のためだけにリールを巻くのはちょっとツラかった。

なぜなら、E2F取材班の中にただ一人、電動リールを使っている男がいたからだ。

みんなが手巻きなら平等だ。しかし一人だけ電動リールが交じると、急にネタミソネミヒガミの感情が沸き起こる。

涼しげな顔でキュイーンと電動リールを操作している男の名は、ヨッシー。当コーナーの主役、吉岡進その人である。

ポイントは港近くながら水深100メートルと深い

船宿で禁じられていない限り、電動リールを使うも使わないも、個人の自由だ。ヨッシーが電動リールを使ったって、なんら問題はない。

しかし、開始早々電動リールに手をかけたヨッシーの姿に、なんとなく釈然としないE2F取材班の面々である。

「プロは黙って手で巻いてこそプロだろうがよ……」

「プロだからこそ手巻きだよ」

「プロってのはよぅ……」

イチロウ、トモキ、タカハシゴーの3名がボヤく。しかし、ことタチウオ釣りに関しては、電動リールのほうが釣果を上げることもままある。

庄治郎丸のタチウオ船は、テンビン、テンヤ、そしてジギングのすべてがOKというフリースタイルである。

E2F取材班を除く7名のお客さんは、テンビンとテンヤを思い思いに使い分けながら、フツーに電動リールを使用している。逆に、手巻きリールに固執しているのはE2Fの3名ぐらいのものである。

大堀船長によると、相模湾のタチウオ釣りは20年以上前に一時的に大フィーバーしたことがあるが、本格的な釣り物として定着し、専門船を出すようになったのは3年ほど前のこと。

東京湾に比べると深場が中心だが、時期によっては浅場に群れが集まることもあるし、大型が交じることもある。

地理的に相模湾のほうが行きやすいお客さんを中心に、隠れた人気釣り物となっている。この日も20名近くのお客さんを集め、2隻出しの盛況だった。

タチウオ釣りの名手として全国津々浦々（つつうらうら）で釣りまくっているヨッシーも、相模湾のタチウオと向き合うのは初めてだ。

「どんな釣りになるんだろうね」と、朝イチはジギングから開始。

「幅広いタナを素早く探れるし、魚の活性も分かる。ま、タチウオのヤル気チェックだね」とヨッシー。6時25分の釣り開始から20分ほどで「食ったよ！」と叫んだ。ヨッシー初の相模湾タチウオである。

「スローなワンピッチジャークで食わなかったからフォール主体のアクションに変えたらドスン！　かわいめサイズだったけど、ヒットした瞬間のドスンはたまらないものがあるよね」

この成果をもってジギングを続けるのかと思いきや、なんとヨッシーは電動リールがセットされたジャッカルのテンヤタチウオ専用ロッド、プライザタチウオを手にしたのである。

「テンビンやテンヤで釣っている人たちに比べると、ジグへの反応が思いのほかよくなかったんだ。やっぱりある程度は数を釣らないと、相模湾タチウオの傾向と対策も分からないしさ」

プロフェッショナルとしての選択であることを強調するヨッシー。手巻きから電動リールへの変更は、なんとなく引け目を感じるものなのだ。……こだわる必要はまったくないのだが、なんとなく……。

ジギングからテンヤにチェンジ入れ食い王・ヨッシー爆誕

しかし、電動リール＋テンヤに替えてからのヨッシーは凄まじかった。

ヨッシーなりに試行錯誤を重ね、この日の結論に達してからは、まさに竿とリールが火を噴く勢いで釣りまくったのである。

もはやタカハシゴーのメモでは、フォローしきれなかった。ほかが沈黙している場面でも、一人でバッタバッタとタチウオを釣りまくるヨッシー。

本来であれば鬼気迫るシーンでもおかしくないはずだが、巻きは電動リールのデッドスローに任せ、ときに釣り座に腰かけたまま小さく竿を動かすヨッシーの姿からは、迫力というものが感じられなかった。

だが、本当に強かった。船長いわく「まあまあシブかったで」

▲富士山の絶景を見ながらタチウオ釣りを楽しむヨッシー

▶ヒットパターンをつかむと入れ食いモードに突入

▲相模湾の初タチウオはジギングでゲット

イワシは大きいほうが食いがいい

◉50グラムのタングステン製タチウオテンヤで指幅4本級のタチウオをキャッチ

すね」と振り返るこの日、独り勝ちと言ってもいいほどの釣れっぷりで、20本の釣果をもって相模湾タチウオを完全制覇したのである。

「船長の指示ダナどおりにテンヤを落として、早めの動きからストップ&ゴーしてみたけど、全然アタらなかったんだ。

今日の正解は、デッドスローで巻き上げ続けながらのバイブレーション釣法だね。

E2F取材班のみんなやほかのお客さんの様子を見てると、バラシが多かった。たぶんアタリの数自体はおれもほかのみんなも変わらなかったと思うけど、おれは取りこぼしが少なかったんだよね」

つまりヨッシーは、ラクチンだから電動リールを選んだのではない。より多くの釣果を狙っての戦略だったのである。

「デッドスローで巻き上げながらたたき続けるのは人間にはなかなか難しいけど、電動リールなら簡単だからね。

深いから電動リールってわけじゃないんだよ。釣りの幅を広げてその日の状況に応じるための電動リールって感じかな。はっはっはっ」

余裕の笑みである。

ぼやきまくっていたE2F取材班の手巻きリール組は、「男は黙ってリール巻く」的な妙なこだわりに負け、釣果を逃してしまったのだ。

……と言いつつ、彼らも彼らなりに頑張っていた。トモキ、イチロウ、タカハシゴーともに6〜7本の相模湾タチウオを手にしていたのだ。

ヨッシーの半分以下とはいえ、初の相模湾タチウオと思えばまずまずの釣果である。

▲巻き上げ速度4のデッドスロー巻き上げでたたきを入れるバイブレーション釣法でよく釣れた

▲当日はジギング用とテンヤ用の2タックルを持ち込んだ

相模湾のタチウオが持つ独特のクセとは何？

乗船前は「今日はジグで通しますよ！」とキッパリ言い切っていたトモキだが、アタリの多いテンヤの魔力にすぐに負け、宗旨変えしていた。

そして手巻きテンヤながら、ヨッシーとまったく同じことを感じていた。

「ジグはパターンが見つけられず、モヤモヤしてたんです。でもテンヤはタナと動きさえ合っていればアタリは出た。だからテンヤにスイッチです（笑）」とトモキ。

イチロウは、「空回りしちゃいましたね……」とシブい表情を浮かべる。

「テンヤに食ってくる時間帯に、うまく乗せられなかった。アタリは出てたんですけどね〜。

ヨッシーやトモキの話を聞くと、テンヤを止めていたからかもしれない。水深が深かったから、合わせも決まらなかったのかなぁ……」

その言葉を受けて、ヨッシーが説明する。

「今回攻めた80〜90メートル前後の深さなら、合わせが決まらないことはないと思う。イチロウさんはパワフルな合わせをするしね。

それより、タチウオが変な角度でテンヤを食ってきてたような気もするんだ。

タチウオって地域によってキャラクターがだいぶ変わる魚なんだけど、相模湾のタチウオにも独特のクセがあった。

ジギングでも「ここで食ってくるだろう」という場面で口を使わなかったり、止めを作るとバラシが多くなったりね……。

でもこういう地域性を見つけるのがタチウオ釣りの面白さ。関東圏の人なら、東京湾だけじゃなくて今回の相模湾とか、色んな海域のタチウオを攻略するのも楽しいと思うよ」

そんな中、相模湾タチウオの魚影自体は濃そうだという手応えを、ヨッシーは感じた。

「今日はちょっとシブめだったけど、それでもテンヤで20本釣ってるからね。活性が高いときなんかはジグが落ちないんじゃないかな（笑）」

特筆すべきは、永遠の初心者であり意固地のカタマリでもあるタカハシゴーが、だれよりも長くジギングを続け、3本ほどタチウオを釣ったことだ。

最終的にはテンヤの魔力に負けて4本を追加したタカハシゴーだったが、決して上手ではない彼がジギングとテンヤでそこの釣果を出したということは、相模湾タチウオのポテンシャルの高さを示している。

「色んな海域で色んなクセのあるタチウオを釣ることは、自分の引き出しを増やすことでもある。今日も勉強になったよ」

電動リールとともに颯爽と去って行くヨッシーなのだった。

▲永遠の初心者タカハシゴーはパープルカラーのジグで3本のタチウオをゲット
◀食いが立つとジグでもテンヤでもこのとおり。トリプルヒットを達成

▲板倉さんがジギングで釣り上げたミシマオコゼ

▲掛け損ねて天を仰ぐこともあった

ヨッシーのメモリアルショット

◉ボートキャプテンとして連日のように東京湾に繰り出し、キャスティングのサワラゲームやビッグベイトのシーバス釣りをガイドし、多忙を極めるヨッシー。とくに10月は休みがほとんどなくお疲れモード。当日は取材班のイチロウさんからエナジードリンクをもらい、エネルギーチャージ完了。心ゆくまで相模湾のタチウオ釣りをエンジョイした。